

中国都市部の回族親子から見る家庭内の権威・権力関係
—西安回族を事例に—

王 韻寒（中央大学大学院文学研究科）

1、問題の所在と研究目的

中国の家庭構造は、改革開放以降の急速な都市化・グローバル化の影響を受け、規模の縮小、核家族化、権力関係の民主化といった変容を遂げてきた。特に伝統的な父権制に基づく家族制度は、経済的自立や個人主義的価値観の浸透により弱体化している。回族家庭のようにイスラム文化と中国伝統文化が融合した独自の家族構造を持つ集団では、変容のプロセスがより複雑化している。

先行研究では、回族家族の権威構造は「父尊子卑」を中心とした父権的秩序に規定されるとされてきたが、都市化に伴う核家族化や若年世代の経済的自立は、家長権の衰退や女性地位の上昇を引き起こしつつある。本研究は、マックス・ウェーバーの「伝統的支配」理論と森岡清美の権威・権力関係分析を枠組みとし、以下の問いに答えることを目的とする：

- ①都市化の進展により、回族家庭内の父権・家長権はどのように再構築されるか。
- ②母方親族の影響力拡大が、家庭内の権力関係にいかなる新たな力学を生むか。

2、研究方法

西安回坊出身の男性（4人）を対象に半構造化インタビュー調査を行った。男性に焦点を当てた理由は、第一に、回族社会では家長権が男性に帰属し、宗教・経済・意思決定において男性が伝統的権威を担う。西安回坊でも、宗教的指導者や家族の意思決定者が男性であることが依然として主流であり、男性を対象とすることで、伝統的権威構造の変容をより明確に抽出できる。第二に、研究の段階性を考慮した。本研究は、父子関係のダイナミクスに特化した基礎的枠組みを構築することを優先し、ジェンダー役割の多様性といった複雑な変数を一時的に制御するため、対象を男性に限定した。これは、将来的に女性を含む比較研究を展開するための前段階的アプローチとして位置づけられる。インタビュー調査では、親子関係、親族関係、家庭教育、回族の行事と生活習慣といった生活様式、信仰に対する意識や行動などの質問を行った。

3、結論

第一に、父親の役割は従来の「絶対的家父長」から多様化する。具体的には、父権・家長権は「絶対性」から「分業・象徴・失効」へと多様に再構築され、伝統的家父長制の単線的衰退を超える動態が浮かび上がる。

第二に、母方親族の影響力が権力構造に及ぼす新たな力学が明らかになった。D氏の事例では、母方親族の絶対的権威が核家族を越境し、父を二重に周縁化する「横断的支配構造」が存在した。これは従来の父系中心分析を批判的に再考する必要性を提起する。

第三に、若年世代の「孝而不順」が孕む倫理的衝突が顕在化した。B氏の独居生活やD氏の世代間対立は、宗教的善行の個人化と権威服従の強制が衝突するところを表す。これはイスラム倫理が内面化される現代的な信仰形態と、儒教的孝道が求める外形的服従との緊張関係を反映しており、先行研究が言及していない宗教と世俗の倫理衝突を実証的に明らかにした点に、本稿の学術的オリジナリティとなった。

今後の課題として、ジェンダーの視点から家庭内権力構造の分析を深化させることが求められる。これまでの研究は、息子（男性）の視点から親子関係を分析したが、女性を対象とする調査を加えることで、父母の権威関係がどのようにジェンダーによって変化するのか、また、母方親族の権威が娘にどのような影響を与えるのかといった新たな側面を明らかにできると考えられる。

キーワード：回族家族、権威関係、親子関係